

第13回キャリア教育推進連携表彰 取組概要

令和7年2月6日（木）
文部科学省
経済産業省

第13回キャリア教育推進連携表彰 受賞団体取組概要

最優秀賞 ○宗像市教育委員会（むなかた子ども大学）

優秀賞 ○多良間村グッジョブ地域連携協議会 ○新潟県立海洋高等学校
○ハッピー上市会 ○吉賀高校版 サクラマスプロジェクト

奨励賞 ○新潟県立中条高等学校 ○ライフ・キャリア図鑑「COMPASS」

最優秀賞

団体名	むなかたしきょういくいいんかい むなかたこどもだいがく 宗像市教育委員会（むなかた子ども大学）
取組内容（概要）	学校教育におけるキャリアプランニング能力の向上に向けた取組を補完、強化するものとして「むなかた子ども大学」に取り組んでいる。その枠組みにおいて、教育委員会が主体となって、企業・団体・大学等の協力のもと展開する約35の講座の中から1つを児童生徒が選び、職業に対する想い・楽しさ・やりがいなどを学べる「メインキャンパス」、月に1回程度、この日にしかできない職業体験をとおして深く学ぶ「特設講座」、市内全小学校が主体となって、企業・地域などと連携・協働し、子どもたちの興味・関心を深掘りする体験や学習を行う「むなかた子ども大学の日」を開催している。

優秀賞

団体名	たらまそんぐつじょぶちいきれんけいきょうぎかい 多良間村グッジョブ地域連携協議会
取組内容（概要）	「多良間村グッジョブ地域連携協議会」は、産業・経済団体、行政、地域コミュニティが協働し、地域連携型キャリア教育を推進するため、多良間小学校・中学校の教育機関をサポートしている。小学6年生から中学3年生の期間において、発達段階に合わせた系統的・計画的なキャリア教育プログラムの実践を、多良間村の特性や課題を踏まえて支援し、「将来、多良間村に貢献できる人材育成」に取り組んでいる。
団体名	にいがたけんりつかいようこうとうがっこう 新潟県立海洋高等学校
取組内容（概要）	地元自治体や地域の産業界と連携し、学んだ知識と技術を発揮しながら水産・海洋関連産業や地域の課題解決に取り組む教育プログラムを展開している。令和3年度に文部科学省委託「マイスター・ハイスクール事業」によって、教育プログラムで協働する学校外部の関係者の声がかリキュラム刷新へ反映される体制が整い、本校生徒の学びの質向上と学習成果の地域産業への還元を持続的に展開している。
団体名	はっぴーかみいちかい ハッピー上市会
取組内容（概要）	上市高校は3分の2超の生徒が県内就職する総合学科である。在学中にしっかりと職業観を育み、地域に愛着を持って自分に適した又はやりたい仕事に就けるよう、インターンシップに加え、数年前から実施している「職場見学」や「職業を知る会」、さらには本年度から県内県立高校では初の実際に対価を得て働く「キャリアバイト」を開始するなど上市町内の様々な企業が官や学と連携してキャリア教育を積極的に展開している。
団体名	よしかこうこうばん さくらますぶろじえくと 吉賀高校版 サクラマスプロジェクト
取組内容（概要）	サクラマスプロジェクトは、吉賀町の教育の長期的な取り組みであり、柱でもある。学校・家庭・地域が一体となり、吉賀町での豊かな学びや体験、多様な人との交流を充実させ、いつの日か吉賀町を支える人材（財）を育てるといふ、吉賀町の保・小・中・高すべての子どもを対象にしたキャリア教育プログラムであり、吉賀高校のスクールミッションと重なる取り組みである。

奨励賞

団体名	にいがたけんりつなかにょうこうとうがっこう 新潟県立中条高等学校
取組内容（概要）	普通科の学びとともに地域学習を通して「学びを社会で活用する力」を身につけ、主体的に社会貢献できる人材を育成するカリキュラムとした。地域・行政・大学等と連携した「中条高校地域アカデミー」を構築し、地域の課題発見・課題解決に取り組んだ。地元企業のプログラミングによるDX、地元店舗の広告用ポスター・CM動画の作成、地元食材を使った商品開発など地域学習・地域連携をベースにしたキャリア教育に取り組んでいる。
団体名	らいふ・きやりあずかん「こんばす」 ライフ・キャリア図鑑「COMPASS」
取組内容（概要）	様々な分野で活躍する大人（大学生含む）が自身の経験・現在・未来について語ったプロフィールページをWEB上に作成。その中で中学生が興味を持った分野の活躍する大人と、オープンチャットで交流し、アドバイスを得る。中学生が自分のロールモデルとなるような大人を見つけ、将来への展望を持って様々な学びや体験ができるようにする。本サイトは学校で外部講師を招聘する際の人材バンクとしても活用が可能である。

【取組概要】

団体名	宗像市教育委員会（むなかた子ども大学）
活動の内容（概要）	学校教育におけるキャリアプランニング能力の向上に向けた取組を補完、強化するものとして「むなかた子ども大学」に取り組んでいる。その枠組みにおいて、教育委員会が主体となって、企業・団体・大学等の協力のもと展開する約 35 の講座の中から 1 つを児童生徒が選び、職業に対する想い・楽しさ・やりがいなどを学べる「メインキャンパス」、月に 1 回程度、この日にしかできない職業体験をとおして深く学ぶ「特設講座」、市内全小学校が主体となって、企業・地域などと連携・協働し、子どもたちの興味・関心を深掘りする体験や学習を行う「むなかた子ども大学の日」を開催している。

受賞理由

- まだ、歴史は浅いが「メインキャンパス」「特設講座」など多様な体験の機会を頻繁に設定している。
- 市内全小学校が参加するなど普及している。
- 主体的なキャリア形成支援のためには子供時代のより多くの社会体験・職業体験の機会が必要であるが、そのために幅広い関係機関が積極的にかかわっており、協力性は十分である。とくに家に籠りがちの不登校児童生徒に対して、社会とつながるきっかけになるように働きかけるなどの誰一人取り残さない配慮が、定住都市宗像の実現に一役買うのではないかと感じた。継続性に於いてもアンケートを活用して、今年 4 年目で 14 講座増と創意工夫されていることが伝わってきた。さて今後「本物から学ぶ」「本物を体験する」子供たちの楽しい体験が、やりがいや勤労への意欲、志へと変容する結果が楽しみである。
- 多数の協力者をどのように集めたのか、どのように運営しているのか。たくさん知りたいことがあった。
- 参加生徒数が 1 万人を超え、国内での協力ある機関と多数連携し海外ともつながる、スケール感のある取り組み。それは「本物の体験」にこだわることの魅力が理解されているからだろう。小中一貫の縦と地域での横のつながりという考え方も、地域での存在感を増す要因となっている。不登校者など取り残さないという思想や、食育への貢献など価値の高い取り組みである。
- 単なる体験活動の提供ではなく、その仕事の社会的意義や役割、働く人の様々な思いや苦勞、楽しさを伝えることで、子どもたちの勤労への意欲や理解度を高め、それぞれが将来の進路を個に応じて選択する能力が育まれるよう、各参画事業者と協議を重ね、講義内容を組み立てられている点。また、不登校児童生徒についても、年間を通じて社会的自立につながる様々な学びの場を企業やソーシャルワーカー・不登校児童生徒の保護者と協力のもと提供し、誰一人取り残されない学びの保障及び不登校児童生徒が社会とつながるきっかけづくりに向けて取り組んでいること。

連携・協働している機関や団体、組織

【教育関係者（学校、教育委員会等）】

宗像市教育委員会、宗像市立小・中学校、宗像市立義務教育学校、福岡県立宗像高等学校、国立大学法人 福岡教育大学、日本赤十字九州国際看護大学、学校法人 東海大学、福岡県立少年自然の家「玄海の家」、認定こども園 いちごいちえん、総合学園ヒューマンアカデミー 福岡校、公立大学法人 北九州市立大学、国立大学法人 九州工業大学、九州産業大学造形短期大学部、福岡デザイン&テクノロジー専門学校、福岡スクールオブミュージック&ダンス専門学校 高等課程、福岡 ECO 動物海洋専門学校、EXPG 高等学院 福岡校、マウントロスキル校（ニュージーランド）、アリゾナ大学（アメリカ合衆国）

【行政（首長部局等）や地域・社会（NPO法人やPTA団体等）、産業界（経済団体や企業等）】

【行政】宗像市、金海市（大韓民国）

【地域・社会】福岡県宗像警察署、宗像地区消防本部、社会医療法人水光会 宗像水光会総合病院、在福岡米国領事館、NPO 法人 アジア太平洋こども会議・イン福岡、NPO 法人 ホークスジュニアアカデミー、社会福祉法人 北筑前福祉会、一般社団法人 BC-ROBOP、一般社団法人 くらげれんごう

【産業界】アビスパ福岡株式会社、イケア・ジャパン株式会社、株式会社イワタダイナース、エフコープ生活協同組合、株式会社大濠企画、株式会社カプコン、九州朝日放送株式会社、九州電力株式会社 福岡支店、九州旅客鉄道株式会社 赤間駅、株式会社 QTnet、株式会社グラノ24K、株式会社グルーヴノーツ、株式会社 Growbuddy、株式会社グローバルアリーナ、西部ガス株式会社、自衛隊福岡地方協力本部、資生堂ジャパン株式会社、シフトプラス株式会社、シャボン玉石けん株式会社、株式会社 JAL スカイ九州、株式会社スターダム、セイハネットワーク株式会社、総合警備保障株式会社 福岡支社、有限会社チョコレートショップ、東邦レオ株式会社、トヨタ自動車九州株式会社、ニチモウ株式会社、日本航空株式会社 福岡空港支店、日本文教出版株式会社、野村證券株式会社 北九州支店、パナソニック株式会社 エレクトリックワークス社、株式会社福岡銀行、株式会社マサエイ水産加工、宗像動画製作所、吉本興業株式会社、株式会社読売新聞 西部本社、理想科学工業株式会社

活動開始の経緯

宗像市は北九州市及び福岡市の間位置するベッドタウンとして発展してきた。一方、キャリア教育という側面では、子どもたちが多くの職業に触れる機会が都市部ほど恵まれておらず、新型コロナウイルス感染症拡大を契機として、社会環境や産業・経済の構造的変化、雇用の多様化・流動化が急速に進んだことで、望ましい勤労観・職業観を育むことや、子どもたちが将来に夢や希望を抱くことがより困難になった。このような環境下において、子どもたちのキャリアプランニング能力を醸成するにあたり、様々な社会体験・職業体験が求められる一方、体験機会の創出は学校教育だけでは困難であった。

そのため、教育関係者・企業・団体・市民・行政等が総がかりで、子どもたちの興味・関心を深掘りする学びを提供する取組として、「むなかた子ども大学」を令和3年度から開始した。本事業は、子どもたちが多分野にわたって「本物から学ぶ」「本物を体験する」ことで、学校教育におけるキャリアプランニング能力の向上に向けた取組を補完・強化し、子どもたちが自身の可能性を広げるとともに新たな可能性を発見し、興味・関心を「志」へと変容させることを目指すものである。

「協力性」についての具体的な取組、工夫している点など

宗像市では、小中一貫教育により、9年間の「縦のつながり」を図っている。また保護者や地域の方と学校で構成する学園運営協議会を設置し、学校運営に取り組むコミュニティ・スクールにより、地域や家庭との「横の連携」を強化し、双方を一体的に推進してきたことで、社会が急速に変容する中でも、保護者や地域住民とお互いの情報や課題を共有し、これからの時代を生きる子どもたちのために共通の目標・ビジョンを持って、日々の教育活動を進めていく体制を整えている。

また、単なる体験活動の提供ではなく、その仕事の社会的意義や役割、働く人の様々な思いや苦労、楽しさを伝えることで、子どもたちの勤労への意欲や理解度を高め、それぞれが将来の進路を個に応じて選択する能力が育まれるよう、各参画事業者と協議を重ね、講義内容を組み立てている。

さらに、不登校児童生徒に対しても、企業やソーシャルワーカー・不登校児童生徒の保護者と協力のもと、年間を通じて社会的自立につながる様々な学びの場を提供し、誰一人取り残されない学びの保障及び不登校児童生徒が社会とつながるきっかけづくりに向けて取り組んでいる。

「継続性」についての具体的な取組, 工夫している点など

全国的な人口減少及び少子高齢化の進展に伴い、企業・団体においては担い手不足、大学等の教育機関においては入学者数の減少、宗像市においては人口構造や地域経済構造の偏りが都市経営に影響を及ぼすなど、各方面で持続可能性が低下している。そのような中、「子どもたちが興味・関心を持つ仕事について、本物の体験をとおして様々な切り口から深く学び体験することのできる取組を、市内在住の児童生徒だけが受講できる」仕組みとしたことで、宗像市だけが持つまちの魅力として、市外住民の転入のきっかけづくりに寄与するとともに、企業や団体、教育施設にとっては、その仕事内容や教育内容を深く理解し、それぞれの取組に親和性の高い子どもたちを育てることで将来の担い手確保の一助となるなど、宗像市だけでなく宗像市と連携・協働する企業・団体・教育施設にとっても持続可能性の向上に寄与している。

「実践性」についての具体的な取組, 工夫している点など

従前より協力いただいている事業者による講座だけでなく、地域特性や社会情勢（デジタル化やグローバル化等）の変化に伴い生じた社会的ニーズ、講座受講後に行うアンケートをとおした参加者ニーズを踏まえた講座を毎年新たに展開している。

また令和4年度から、学校教育におけるキャリア教育の一環として、11月に「むなかた子ども大学の日」を設定し、市内小学校・義務教育学校が主体となり、保護者・企業・団体・地域などと連携・協働して子どもたちの興味・関心を深掘りする体験や学習を実施している。

「発展性」についての具体的な取組, 工夫している点など

令和3年度に21講座から始まった「むなかた子ども大学メインキャンパス」は、協力企業・団体・大学が年々増加しており、今年度は34の講座を展開した。

また、「メインキャンパス」に参加できない子どもたちに対してもより多くの学びを提供できるよう、月に1回程度、1つのテーマに絞った「特設講座」を展開し、「本物から学ぶ」「本物を体験する」機会を提供している。「メインキャンパス」は多くの事業者が市内の会場に集まり、様々なコースを展開する一方、「特設講座」では、コースを提供する事業者の施設等を訪問し、より現実に即した設備や環境に触れるような内容の提供を可能としている。

さらに、前述の「むなかた子ども大学の日」において保護者・企業・団体・地域等との協働による、学校教育内でのキャリア教育の機会も生まれ、宗像市で暮らす児童生徒が年間をとおして充実したキャリア教育を受けられるよう取り組んでいる。

加えて今年度は、宗像市が重点施策として推進している「食のまち宗像」の取組の中で、特に拡充を図っている食育事業においては、学校と企業や大学との協働により、地元食材を活用した特産品開発を「むなかた子ども大学」に位置づけた取組として実施することで、子どもたちが食材をとおして宗像の魅力を知り、ふるさとへの愛着と誇りを醸成するとともに、宗像市におけるキャリア教育のさらなる充実に向け取り組んでいる。

学校現場の評価・感想・コメント

(宗像市立河東西小学校 教頭)

「むなかた子ども大学の日」のおかげで、子どもの学びに関心を持ち、参画してくれる保護者や地域の人が増えたと感じる。本校の6年生の授業では、保護者や地域住民に参加してもらい、自身の勤労観・職業観について児童に話してもらおう機会を設けている。子どものキャリア教育の充実だけでなく、大人にとっても学ぶ機会になり、地域の子どもの理解が広がった。

「メインキャンパス」や「特設講座」は、提供される体験活動の内容が素晴らしいと感じる。様々な職種の中から、児童生徒は好きなものを選択でき、実際の場所に行ったり、本物を使ったり、そこで働く人の本音を聞いたりして、学校ではできない活動を実現してもらっている。学校教育の補完と充実を図る教育委員会の取組に感謝している。子ども達も、子ども大学のチラシを毎回楽しみにしている。

(宗像市立玄海小学校 主幹教諭)

宗像市一斉で「むなかた子ども大学の日」を設定してあることで、今求められている社会に関われた教育課程の実現やICTを活用した主体的・対話的で深い学びの充実を図るきっかけとなっている。教師がこの取組を通して目指すべき学習の在り方を意識したり、地域の財を活用した学習を計画したりすることで、子供が社会の中の本物と関わりながら情報活用能力や考えを表現する力を育成することに繋がっていると実感している。

関係諸機関（行政・産業・地域団体等）からの評価・感想・コメントなど

(国立大学法人 福岡教育大学 松久教授)

弊学は『子ども大学』を立ち上げるにあたり、ワークショップに不慣れな企業等を支援することで、各企業の講座作りへの不安感の払拭と会場全体の企画・装飾の充実を目指した。2年間の連携で事業担当者が同様のスキルを習得し、3年目以降は宗像市の担当者が独自の企画支援や装飾展示で本事業を盛り上げており、こういった宗像市職員の努力が参加企業数や児童生徒数の拡大につながっていると感じる。現在は参加大学の一つとして美術や教育に関する講座を担当しているが、参加した子どもたちや保護者の評価も高く、社会的に有意義な活動といえる。

(アビスパ福岡株式会社 吉浦様)

宗像市とアビスパ福岡は2021年12月15日にフレンドリータウン協定を締結させていただいた。宗像市が推進する「スポーツで笑顔・元気溢れるまちづくり」とアビスパ福岡の基本理念である「地域に根ざしたスポーツクラブ及び地域に生活する人々とともにスポーツを通じて子どもたちに夢と感動を、地域に誇りと活力を与える」という目的を達成するために、むなかた子ども大学の初年度から参加させていただいている。

むなかた子ども大学では「サッカー選手コース」として講座を開いているが、「サッカーを全力で楽しむ!」「一生サッカー好きになる」ということをプロサッカー選手になったときに忘れないようにするために、ボールを使った様々な楽しい競技を行っている。

むなかた子ども大学に参加したことをきっかけに、アビスパ福岡のホームゲームの試合を初めて観戦に来ていただいた方もいらっしゃるので、大変嬉しく思う。

(シフトプラス株式会社 山本様)

立ち上げ当初から3年間連続で講師を行っている。

義務教育とは違い、「好きなことを学ぶ」「社会と触れ合う」大学のような講義をカジュアルに『楽しく』実施されていると感じる。産官学、そして子どもたち。楽しくチャレンジをし続けることで、さまざまな未来へのきっかけが生まれる場所になる取組と言っても過言ではない。

個人的には、この取組を通じて、大人をびっくりさせるような子どもたちに出会いたい。

(福岡スクールオブミュージック&ダンス専門学校高等課程 松野様)

令和5年度より参加させていただき、我々としても大変貴重な機会を頂いている。社会に築かれている様々な職業がある中で、子供たちから見える職業は恐らくごく一部であるように思う。そんな中、「本物から学ぶ」「本物を体験する」という、正に夢を実現させたかのような取組は、純粹で元気旺盛な子供だからこそ得られる大きな刺激で満ちていると感じている。社会における視野だけでなく、将来を担う子供たちにとって人生を広げている機会にもなっている。

(九州朝日放送株式会社 諫山様)

弊社ではアナウンサー体験コースを提供したが、目を輝かせる子ども達の表情が印象的で、正直ここまでやれるものかと驚かされた。メインキャンパスでは弊社だけでなく、複数の事業者が講座を提供している中、その1つ1つで子ども達は初めての体験をして、普段の学校生活とは違う刺激を受けたと思う。逆に、弊社を始め、参加した事業者もまた、子ども達から刺激を受けた。こうした「場」を提供してくれる取組は、事業者としても、直接、仕事や業界の魅力を子ども達に伝えられる数少ない機会だと思う。将来、この講座を受けた子ども達の中から、九州朝日放送のアナウンサーが誕生する日が来ることを楽しみにしている。

(株式会社 JAL スカイ九州 豊田様)

地域をあげて子どもたちのキャリアプランニング能力を醸成できるこの取組みに共感し、開催当初より4年連続で参加している。

子どもたちが自ら選んだ興味・関心のあるコースに参加することで受け身ではなく「なぜ?どうして?」と、主体的に学ぶ姿勢につながっている。

飛行機の飛び仕組みについて、実験を通して学んだり、実物大の航空コンテナの中を見たりなど、普段は経験できない「本物から学ぶ」機会を提供することができて大変嬉しく思う。また、空港では飛行機を飛ばすために、グランドスタッフ・グランドハンドリング・航空整備士・航空貨物などさまざまなスタッフが働いていることを紹介することで、子どもたちの興味・関心を広げ、将来の選択肢を増やすきっかけになることを期待している。

あわせて、講師経験を通して弊社社員の人材育成にも繋がっており、このような機会をいただけることに感謝している。

今後も参加を通して宗像市の人材育成の一助になれば幸いである。



【取組概要】

団体名	「多良間村グッジョブ地域連携協議会」
活動の内容（概要）	「多良間村グッジョブ地域連携協議会」は、産業・経済団体、行政、地域コミュニティが協働し、地域連携型キャリア教育（『多良間村型キャリア教育』）を推進するため、多良間小学校・中学校の教育機関をサポートしている。小学6年生から中学3年生の期間において、発達段階に合わせた系統的・計画的なキャリア教育プログラムの実践を、多良間村の特性や課題を踏まえて支援し、「将来、多良間村に貢献できる人材育成」に取り組んでいる。

受賞理由

- 「15の島立ち」として島に関わる関係者がスクラムを組み「多良間グッジョブ地域連携協議会」を発足させ、村会議で「子ども議会」を開くなど子どもを主体としながら地域連携型のキャリア教育は持続可能な展開と考える。沖縄本土との交流も今後の展開として化学反応が起きる仕掛けである。
- 「15の島立ち」という言葉が印象的で、地域において若者の旅立ちを祝福しながらも、寂寥感が感じられる。将来地域貢献できるという未来人材育成の取り組みであり、地域の思いや一体感が現れたキャリア教育である。かつしっかり仕組み化されており、目指すべき力が明確で、年々改善が継続している。保護者ニーズへのフォーカスも他地域の参考になる。
- 高校入学前の不安感を解消する観点で効果的な取組みと評価。
- 中学卒業とともに島から旅立つ若者に対して、島で暮らしているうちに地域連携型のキャリア教育を行おうとする心温まる取組である。将来島に戻る人が増えることを願う。

連携・協働している機関や団体、組織

【教育関係者（学校、教育委員会等）】

- ・多良間村教育委員会（多良間村グッジョブ地域連携協議会事務局）
- ・多良間村立多良間小学校
- ・多良間村立多良間中学校

【行政（首長部局等）や地域・社会（NPO法人やPTA団体等）、産業界（経済団体や企業等）】

- ・NPO法人ふしゃぬふネット（多良間村郷友会地域支援ネットワーク）
- ・多良間村観光振興課 ・多良間村産業経済課 ・JAおきなわ多良間支店
- ・一般社団法人多良間村ふしゃぬふ観光協会
- ・株式会社ケイオーパートナーズ（運営アドバイザー）

活動開始の経緯

沖縄県の離島である多良間島には高等学校がなく、中学卒業とともに進学のために島を離れる（「15の島立ち」と呼んでいる）。「15の島立ち」に向けた「生きる力」の育成と、多良間村に貢献できる人材育成・人材の還流を目指し、多良間村の各団体が協働し「多良間村グッジョブ地域連携協議会」が平成27年度に発足し、地域連携型キャリア教育を推進している。

「協力性」についての具体的な取組、工夫している点など

多良間島には高等学校がなく、中学卒業と同時に島を離れる現状があり、少子高齢化や人口減少が課題となっている。多良間村では、地域活性化を図っていく事を施政方針に示し、Uターンや「島の明日を切り開く人づくり」を促進している。その中で、地域の特性を理解し未来の多良間村に貢献で

きる人材を育成・輩出していくために、小学校高学年から中学校3年間を通した系統的なキャリア教育の充実が求められる。

そのため、経済団体、行政、地域コミュニティが協働し「多良間村グッジョブ地域連携協議会」が立ち上げられ、地域連携型キャリア教育（『多良間村型キャリア教育』）を推進し、小・中学校のキャリア教育をサポートしている。

具体的には、年度初めに「多良間村グッジョブ地域連携協議会」を開催し、年間の『多良間村型キャリア教育』の内容確認や、各プログラムへの支援体制が協議される。

例えば、村内の職場体験学習では産業経済団体が受け入れしたり、地域企業等へ協力を呼びかけたりする。また、村内産業視察では行政の産業経済課や観光振興課が案内し説明を行ったり、沖縄本島での職場体験学習やジョブシャドウイングではNPO 法人が協力するなど、各関係団体が専門性を生かして小中のキャリア教育をサポートしている。このようにキャリア教育に必要な幅広い関係機関が協働し、将来の人材の還流を期待し、協力的に小中の教育機関に支援を行っている。

「継続性」についての具体的な取組、工夫している点など

(1) 「多良間村グッジョブ地域連携協議会」は幅広い関係機関から構成されているが、**事務局を担当する多良間村教育委員会が中心となり**、組織がしっかり確立している。そのため、各機関とも「地域連携型キャリア教育（『多良間村型キャリア教育』）推進のため、教育機関の小学校・中学校を支援していく」という共通の方向性と理念を持っている。

(2) 地域連携型キャリア教育（『多良間村型キャリア教育』）を行うことで、身に付けさせたい力が明確に記され、共有できている。〔就業意識の向上・自立への心構え・将来の地域を支える意識の向上等〕

(3) 発達段階に応じた小6～中3を系統的につなぐ「キャリア教育プログラム」を、前年度の反省や運営アドバイザーの意見を踏まえて見直し、今年度の計画に生かしている。PDCA マネジメントを実践することで、**平成30年度からは中学1年生向け、令和5年度からは中学3年生向けの新たなプログラムにも取り組んでいる。**

(4) 「多良間村グッジョブ地域連携協議会」を年3回計画的に開催し、プログラムの進捗状況報告や、受け入れ企業からのヒアリング・アンケート結果の確認、児童生徒の成果発表を聴くなど、各プログラムの評価・分析を行い、次年度以降の取り組みの改善につなげている。

「実践性」についての具体的な取組、工夫している点など

多良間村グッジョブ地域連携協議会が支援する『多良間村型キャリア教育』について

(1) 保護者のニーズの観点から

「15の島立ち」で島（親元）を離れるため、自立心やコミュニケーション能力の向上、人間関係や規範意識、将来の進路選択や職業選択の視野を広げて欲しい等、保護者には学校教育に対する強い要望がある。そのことは、多良間村型キャリア教育を通して、見につけさせたい力と合致しており、保護者のニーズを踏まえた実践と捉えている。（具体的な取組として、職業人講話、電話対応や挨拶、コミュニケーションなどのマナー学習及び講話、職場見学、職場体験、ジョブシャドウイング等）

(2) 地域のニーズの観点から

多良間村では少子高齢化や人口減少が課題となっているため、地域活性化を目指し「島の明日を切り開く人づくり」を推進している。多良間村型キャリア教育は、将来多良間村に貢献できる人材輩出を促進するための資質・能力の育成を図っている。支えられる側から支える側への『人材の還流』を期待しているため、関係機関が協働体制でキャリア教育の推進を支援している。

(3) 学校のニーズの観点から

改訂された学習指導要領で、「社会に開かれた教育課程」の実現が重要となっている。よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るという理念を学校と社会とが共有化し、見につけさせたい資質・能力を明確にして、社会との連携・協働による実現が求められている。『多良間村型キャリア教育』は、社会へ開かれた教育課程の実践を促進していると捉えている。

「発展性」についての具体的な取組、工夫している点など

(1) 「多良間村グッジョブ地域連携協議会」を組織する各関係機関の働きかけもあり、中学2年生対象の地元での職場体験学習や、中1年対象の地元の産業調査において、好意的に受け入れてくれる地元企業や畜産農家の方々が年々増加している。このことは、地域の子供達は地域で育てようという、地域連携型のキャリア教育が根付いてきていると捉えることができる。

(2) 改訂された学習指導要領におけるカリキュラム・マネジメントの1つの側面に、教育内容と教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせることと記されている。そのことは、地域連携型のキャリア教育の実践内容と合い重なり、効果的な教育活動への支援と捉えることができる。

(3) 平成30年度から中学1年生対象に実施している多良間村課題発見・解決プロジェクト（『プロジェクトT』）は、地元や近隣地域の産業を調べ、地域の現状や課題を捉えて、解決策を考える内容である。多良間村の産業の発展のため、新たな産業を生み出す案や新規産業の誘致案、地元産を生かした6次産業の開発案、新たな観光プラン案などを考案している。子ども目線での地域活性化案を学校内で止めておくのはもったいないため、地域から学び考えたことを地域に発信する機会として、来年1月に村議会で「子ども議会」を開催し、実際に村長はじめ村議会議員、役所の管理職へ提案の答弁をする方向で進めている。地域連携型キャリア教育を通して、地域に対する愛着と誇りを育む事につながっている。

学校現場の評価・感想・コメント

(1) これまで、教育活動に必要な地域等外部からの人的・物的資源の活用を、学校側が交渉・依頼して進めることに大きな負担があり、単発的な取り組みしかできなかった。しかし、「多良間村グッジョブ地域連携協議会」のサポートにより、系統的・計画的な地域連携型キャリア教育の実践が推進できている。学校現場としては生徒への教育的効果はもちろん、職員の業務軽減にも繋がっている。

(2) 離島で生まれ育った子ども達には、沖縄本島（那覇）での職場体験学習や宮古島市の産業視察などは、とても大きなインパクトがあり、勤労観・職業観の育成や将来の進路・職業選択に大きな影響を与えている。「学ぶ意義」と「働く意義」を生徒が実感し目的意識の高揚に繋がっている。

関係諸機関（行政・産業・地域団体等）からの評価・感想・コメントなど

○進学は8～9割が沖縄本島ということで、15歳で島立した後の精神的な不安も軽減されるであろう。NPO法人ふしゃぬふネットとしても、支援の輪を広めていきたい。

○沖縄本島での体験を通して、将来多良間島に貢献する何事にも積極的に挑戦する人材に育ってほしい。（教育委員会関係者）

○沖縄本島や宮古島市での体験学習は、自分たちの住んでいる島を客観的に考えるきっかけにもなったと思う。特に多良間に少ない第2次第3次産業に関わった児童生徒がほとんどで、多良間の将来の発展も見据えながら今後も頑張りたい。(多良間村観光振興課関係者)

○多良間の生徒が地元の畜産業について関心をもって学習するというので、講師を引き受けた。地元の基幹産業について、少しでも興味関心が高まれば幸いである。地元の産業の後継者育成のためにも、多良間の生徒への支援は今後も行っていきたい。(多良間村産業経済課関係者、地元の畜産業者)



- ①沖縄本島でのジョブシャドウイングにおける「直前学習」
- ②沖縄本島でのジョブシャドウイングにおける「出発式」
- ③連携協議会が受け入れ依頼した企業での「ジョブシャドウイング」
- ④沖縄本島での職場体験学習における「直前学習」
- ⑤沖縄本島での職場体験学習における連携協議会メンバーによる「マナー研修」
- ⑥沖縄本島での職場体験学習において多良間島出身でつくる NPO 法人の代表挨拶
- ⑦連携協議会が受け入れ依頼した地元出身が経営する製造業での「職場体験」
- ⑧沖縄本島での職場体験学習における「事後学習」

【取組概要】

団体名	新潟県立海洋高等学校
活動の内容（概要）	地元自治体や地域の産業界と連携し、学んだ知識と技術を発揮しながら水産・海洋関連産業や地域の課題解決に取り組む教育プログラムを展開している。令和3年度に文部科学省委託「マイスター・ハイスクール事業」によって、教育プログラムで協働する学校外部の関係者の声がカリキュラム刷新へ反映される体制が整い、本校生徒の学びの質向上と学習成果の地域産業への還元を持続的に展開している。

受賞理由

- 地元の河川に遡上する市場価値の低いサケの有効利用を目指し、平成23年に自身の授業で鮭魚醬「最後の一滴」を開発している。さらにこれを水産加工ビジネスに発展させるなど、キャリア教育が地域課題の解決と地域産業の創出に結びついており、大変素晴らしい取組である。
- 産官学の幅広い関係機関から構成されている「マイスター・ハイスクール運営委員会」と「マイスター・ハイスクール推進委員会」によって展開され、協力性は問題ない。また継続性についても8年目を迎えるが、「学びの質向上」の成果をアセスメントで確認し、年ごとにPDCAをしっかりと回して運営を行っている。学校が中心となって、地域ニーズが合致する教育プログラムを学年別に実践している。産官学連携のキャリア教育は4つのコースとも地域・社会全体に波及し、その効果は通学域外からの入学生の増加によって、証明されていると言える。現状でも十分に練れた教育プログラムであるが今後さらに連携協定先を増やすなど魅力を増してほしい。
- 地域密着型のキャリア教育が円滑に行われ、成果（学力や関連産業就職率等）も現れている点を評価できる。
- 地域の産業界とがっちり連携して、商品開発・販売の一連の流れを実行する本教育は、とても実践的で付加価値ある取り組みである。複数の委員会を立ち上げて外部リソースを活用する流れは、アセスメントテストで可視化した教育成果につながっている。キャリア教育だけでなく地域の水産加工業の発展にも寄与できる、とても価値ある産学連携活動でもある。

連携・協働している機関や団体、組織

【教育関係者（学校、教育委員会等）】

新潟県教育委員会、糸魚川市教育委員会、高田農業高等学校

【行政（首長部局等）や地域・社会（NPO法人やPTA団体等）、産業界（経済団体や企業等）】

糸魚川市（農林水産課・商工観光課）、（株）能水商店、能生商工会、（株）能生町観光物産センター、（有）SKフロンティア、糸魚川信用組合、上越漁業協同組合、能生内水面漁業協同組合、能生海岸管理組合、（公財）マリンスポーツ財団

活動開始の経緯

地元の河川に遡上する市場価値の低いサケの有効利用を目指し、平成23年に本校の授業で鮭魚醬「最後の一滴」を開発した。これを、仕入れから製造、マーケティング、販売に至るまでを地域で一貫して行う高校生による水産加工ビジネス「糸魚川市水産資源活用産学官連携事業」が平成25年から始まった。令和3年には文部科学省委託「マイスター・ハイスクール事業」に採択され、水産加工に留まらない学習領域にも産学官連携を基盤とした実践的な学習を展開している。

「協力性」についての具体的な取組, 工夫している点など

本校の学校外部と連携した実践的な教育活動は、その運営の理念や指針をつくる「マイスター・ハイスクール運営委員会」（校長・県教育長・糸魚川市長・金融機関部長・商工会会長・道の駅運営会社社長・上越教育大学教授からなる）と、教育プログラムを教員や生徒とともに運用していく具体的な方策を検討して方向性を示す「マイスター・ハイスクール推進委員会」（校長・市教育委員会課長・地元企業社長・漁協組合長等からなる）によって展開している。また、平成30年に16年間勤めた本校を退職し前述の「最後の一滴」の製造会社を創業した株式会社能水商店代表取締役を「マイスター・ハイスクールCEO」として週数日の非常勤勤務で配置し、学校外部のリソースを活用してより実践的な教育プログラムを運営するマネジメントやコーディネートを行なっている。

このような理念共有や意思決定を経て、当地域に根ざす取り組みを継続してきた行政や企業、団体等と学校との信頼関係のなか、本校生徒の「学びの質向上」と「学習成果の地域還元」を目指して協働している。

「継続性」についての具体的な取組, 工夫している点など

毎年度末に「マイスター・ハイスクール運営委員会」と「マイスター・ハイスクール推進委員会」を開催し、1年間に渡って展開した教育プログラムの効果や課題、改善方法の共有を行ない、次年度の運営に生かしている。

「学びの質向上」の成果は、「キャリアプランニング能力」を除く生徒の基礎的・汎用的能力の向上を、河合塾が提供するアセスメントテスト「学びみらいPASS」の年1回の受験をとおして、リテラシーの4つの能力（情報収集力・情報分析力・課題発見力・構想力）とコンピテンシーの9つの能力（対人基礎力（親和力・協働力・統率力）、對自己基礎力（感情抑制力・自信創出力・行動持続力）、対課題基礎力（課題発見力・計画立案力・実践力））の伸長を客観的データで確認し、カリキュラムや教育プログラムの内容の検討に役立てている。

一方、「学習成果の地域還元」については、食品科学コースによる継続的な商品開発と市場流通、資源育成コースが取り組むサケの発眼卵放流の環境大臣表彰等、毎年着実に成果を上げている。したがって、本校の教育プログラムが地域の活性化にも寄与していると考えている。

「実践性」についての具体的な取組, 工夫している点など

本校のキャリア教育は、職業現場のリアリティと地域のオリジナリティのある教育プログラムを実践する中で、専門性と基礎的・汎用的能力を育むことができる。以下が、学年別の取り組みの一例である。

1 学年：学校設定科目「地域探究」において、世界ユネスコ糸魚川ジオパークを基盤とした地域の自然や文化、産業について系統的に学び、校内ビジネスプランコンテストをとおして、これらに付加価値をつけて更に産業振興につなげるアントレプレナーシップも醸成している。

2 学年：4つのコース（資源育成・食品科学・海洋技術・海洋創造）に分かれ、水産・海洋関連産業に関わる基礎的な知識や技術を実習を通じて習得していく。

3 学年：2学年で習得した知識と技術を深めつつ、これらに関連産業や地域の課題解決に活用する教育プログラムを展開する。具体的な教育プログラムの例は下記のとおり。

- ・循環型食糧生産システム「アクアポニックス」の事業化検討
- ・新しいサケの増殖手法「発眼卵放流」の実証試験
- ・地域水産資源を活用した新商品開発

- ・道の駅来場者の駐車ナンバーとWi-Fiによる人流測定の結果から取り組む観光誘客
- ・未利用魚を原料とした有機肥料の製造と地域におけるCO₂削減効果の検証
- ・水中ドローンによるイシモズク生育域の調査 等

このように、生徒の発達段階に応じて学校及び地域のニーズが合致する教育プログラムを産学官連携で提供している。

「発展性」についての具体的な取組、工夫している点など

本校が発展させてきた産学官連携によるキャリア教育は、下記のように地域・社会全体へ波及し、多くの協力を得ている。

- ①資源育成コースでは、サケの発眼卵放流やアカムツ（ノドグロ）の人工授精・稚魚放流などによって地域に貢献している。ともに地域の水産資源の維持・確保に貢献しているが、特にアカムツ（ノドグロ）の人工授精と稚魚放流は、地域の漁業従事者から支援を受けながらの事業であり、昨年度に初めて人工授精で作出した稚魚の放流に成功したことで、漁業従事者たちからたいへん高い評価を受けている。
- ②食品科学コースでは、地域の企業である能水商店と共同で新製品を企画・開発している。これらの製品は地元の道の駅「マリンドリーム能生」の能水商店のアンテナショップで販売され、定番のお土産品として人気がある。週末になると駐車場に収まりきらないほどの観光客が訪れ、生徒が企画・開発した製品が「水産のまち・能生」をPRしていることは地域の企業経営者などから広く認知されている。
- ③海洋創造コースでは、地域のマリンスポーツイベントのボランティアなどに積極的に協力している。また、生徒自らが企画・運営するマリンスポーツイベントを開催するなどし、マリンレジャーを楽しむために訪れる観光客を広く市内外から誘致している。
- ④海洋技術コースでは、従来廃棄物として処理されてきた、いわゆる「魚のアラ」の有効活用として、発酵肥料づくりに取り組んでいる。現在、肥料としての使用を認められるための申請中であり、認可を受けた後は、地域の小学校に提供するなどして地域の景観改善、子どもたちの情操教育や持続可能な社会の構築などに貢献する計画である。

学校現場の評価・感想・コメント

特定の技能を責任感を持ってミスなく発揮することは、今後も職業現場で労働者に求められることになり変わらないが、ICTやAIの活用が普及していくこれからの社会においては、対人基礎力・対自己基礎力・対課題基礎力を着実に身につけることが後期中等教育で求められると考えている。前述のアセスメントテストの結果のとおり、本校のキャリア教育は、このような力の育成に向けたカリキュラムとこれを運用する強固な産学官連携によってその効果を高めている。

さらに、令和元年と令和5年の関連産業就職率と関連分野進学率を比較すると、前者は47.7%から62.0%に、後者は49.2%から64.2%に増加した。このことは、キャリア教育で育成すべき「キャリアプランニング能力」の伸長にも本校の教育活動が有効に作用している証左と考えている。

関係諸機関（行政・産業・地域団体等）からの評価・感想・コメントなど

本校キャリア教育の基盤となっている「糸魚川市水産資源活用産学官連携事業」の連携協定先である「産」と「官」からのコメントを以下に記す。

<行政>

糸魚川市においては、水産業の将来を担う人材育成を図ることは重要な課題であり、その課題解決の一翼を担うともいえる海洋高校とは協定を結び、水産資源を活用した地域振興の取組みを進めているところである。また、専門性を高めた同校の取組みによる市外からの入学生増加は、市の関係人口拡大に大いに寄与している。今後もキャリア教育の発展に期待しているところであり、高校魅力化事業により支援を継続していきたいと考えている。（糸魚川市教育委員会事務局こども課長）

<地域・企業>

地域の企業として海洋高校の教育プログラム支援に携わるなかで、高校生の学習成果が地域経済に直接的に還元されていることを実感している。また、海洋高校の特色ある教育活動が発信され、通学域外からの入学生が増加し、今では全校で100人を超える寮生が当地に住んでいただいていることについては、教育力のある高校であれば過疎地においても存立が可能であることを示すモデルケースになっていると考える。今後も、地域振興につながる海洋高校のキャリア教育が発展するように協働していきたい。（株式会社能水商店代表取締役）



令和4年に地元道の駅に設置した「新潟海洋高校アンテナショップ能水商店」



令和3年から取り組んでいる新しいサケの増殖手法「発眼卵放流」

【取組概要】

団体名	ハッピー上市会
活動の内容（概要）	上市高校は3分の2超の生徒が県内就職する総合学科である。在学中にしっかりと職業観を育み、地域に愛着を持って自分に適した又はやりたい仕事に就けるよう、インターンシップに加え、数年前から実施している「職場見学」や「職業を知る会」、さらには本年度から県内県立高校では初の実際に対価を得て働く「キャリアバイト」を開始するなど上市町内の様々な企業が官や学と連携してキャリア教育を積極的に展開している。

受賞理由

- 対価を得て働く「キャリアバイト」は挑戦的な事例であり、今後の成果と課題の共有に期待
- 同会を毎月行いながら議論を積み上げ、行政（特に町役場）とスクラムを汲みながら参加者を伸ばしていることやキャリア教育推進にかける強い覚悟を校名変更（富山県立キャリア教育高等学校）を要望する姿勢から感じる。
- 地域の課題を共に解決する、企業と就職間際の高校生との良い事例
- 地域密着のキャリア教育として評価。総合学科を活かす上で重要な取組み。離職率の変化など定量評価があるとより良い。
- キャリア教育推進に係る各事業を実施するにあたり、直前のハッピー上市会の定例会議にて、通常の参加者や、事業に協力する総合病院、消防署や保育園等の関係者も出席し、事業の目的等をしっかりと共有したうえで事業に臨むようにしていること。新しい参加者（団体）へ事業の目的等をしっかりと伝えることで、共通認識に基づいた活動の輪が広がり、継続を確かなものに行っていると考えている点です。
- 職場見学、職場を知る会、キャリアバイトという展開は、生徒たちが仕事や職場を知るうえでとても効果的な取り組みである。11年にわたる着実な取り組みによる、キャリア教育の土壌が生み出した仕組みで価値が高い。120回に及ぶ会議の積み上げでの目的共有、社員教育としての企業メリットなどが、地域におけるキャリア教育推進の強みとなっている。

連携・協働している機関や団体、組織

【教育関係者（学校、教育委員会等の機関や団体）】

富山県立上市高等学校

【行政（首長部局等）や地域・社会（NPO法人やPTA団体等）、産業界（経済団体や企業等）】

行政：上市町（総務課、企画課、産業課、教育委員会）、県議会議員、町議会議員

地域・社会：（中小企業家同友会、上市高校PTA、商工会、NPO団体、一般町民等）

産業界：（企業、事業所、金融機関等）

活動開始の経緯

特に上市高校と町役場の幹部職員が加わった平成30年頃からは、地域での教育が頻りに議題に上がるようになった。様々な業種の町内企業（製造業、サービス業、福祉系事業所、IT系企業、建設業、金融機関等）をはじめ、毎回参加者が20～30人程度に増加。上市高校のキャリア教育推進に必要な関係機関との産官学連携体制を構築し、地域全体で教育を考える土壌が育ったことで、キャリア教育に向けた様々な企画を生み出してきた。

「協力性」についての具体的な取組、工夫している点など

本件の強みは、連携・協働している機関や団体、組織が多いにもかかわらず、地域全体で教育を考えるという共通認識を持っていることである。

ハッピー上市会では、各企画の受け入れ側に趣旨を丁寧に説明し、前回の振り返りや現場の声などを紹介したうえで、会の後半ではグループワークを行ってより相互の理解が深まるように努めている。

3つの企画ともキャリア教育にとどまらず、生徒や受け入れ企業にもポジティブな影響を与えている。例えば③「キャリアバイト」に参加した引っ込み思案な生徒が、自信を持って学校生活を送るようになったことや、他のある生徒は保護者の勤務先にキャリアバイトとして参加したところ、保護者がいきいきと働く姿を間近で見て、より介護職への意欲が高まったなど、ハッピー上市会で交わされる日々の意見交換が、地域全体で教育を考えるという共通認識をさらに深め、上市高校のキャリア教育に磨きをかけている。

また、高校側では、生徒のニーズ把握や各事業所との連絡調整、役場側では、会議用スペースやマイクロバス等の提供、企業側では、会議そのものの運営に加え、必要な職種事業所の発掘や声掛けなど、それぞれの強みを活かした協力がなされている。

「継続性」についての具体的な取組、工夫している点など

上市高校のキャリア教育推進に係る各事業を実施するにあたり、直前のハッピー上市会の定例会議には、通常の参加者はもちろんのこと、事業に協力する総合病院、消防署や保育園等の関係者も出席し、事業の目的等をしっかり共有したうえで事業に臨むようにした。新しい参加者（団体）へ事業の目的等をしっかりと伝えることで、共通認識に基づいた活動の輪が広がり、継続を確かなものに行っていると考えている。

一方で、学校側は各企画の参加前に、生徒に聞きたいことや疑問点などの事前アンケートを実施し、アンケートの結果を参加企業に提供することにより、企業は生徒の興味・関心をあらかじめ把握し、しっかりと備えたうえで当日のプレゼンテーションを行うなど、限られた時間の中で、生徒が主体的に学びを深める工夫を繰り返し行なっている。

さらに、事業実施後には、生徒の率直な感想を企業側に提供し、評価や反省を次回に活かせるようにしているほか、定例会議において課題や問題点等について話し合うことで翌年度以降の改善につなげている。

「実践性」についての具体的な取組、工夫している点など

<学校側のニーズ>

ハッピー上市会が上市高校に協力するようになったのは、主体的ではない形で就職し、結果、早期に離職してしまう生徒が少なからずいる中、平成29年に上市高校から生徒の職業観を育成するために協力してもらえないかと相談されたことがきっかけである。学校側としては、職業観を育み、社会でたくましく活躍してほしいという思いがあった。

<地域側のニーズ>

ハッピー上市会においても、高校生に上市町内の企業を知ってもらうことや早期離職を防ぐ必要性が話題となっていたため、協議を重ね、平成30年に「職場見学」を、令和元年には「職業を知る会」を加え実施することになった。

特に、「職業を知る会」には、製造業、建設業、小売業、金融業、農業、宿泊業、IT、デザイン、スポーツ、理美容業、医療、福祉施設、保育所、消防署など、総合学科にふさわしい多種多様な事業所が参加し、生徒のニーズにしっかり応えることができている。

＜効果について＞

各企画で、上市高校を卒業した社員が高校生にプレゼンテーションをする企業も出てきており、循環型の社員教育として役立っているほか、教員も一緒に企業を見学することで、職場の様子や仕事内容などを知る機会となり進路指導に役立っている。

インターンシップや実際の就職先を選ぶ際には本事業がきっかけで選択する生徒が増えていることから、効果的なキャリア教育が推進されているといえる。

「発展性」についての具体的な取組、工夫している点など

キャリア教育に協力する企業は年々増加し、例えば「職業を知る会」には当初20社から今では30社へと拡大してきている。また、今年度より開始した「キャリアバイト」には、上市町内に限らず、生徒が住んでいる近隣市町村の事業所が受入先として多数参加（本格開始後三月で約30社）している。

上市高校PTAでも生徒の職業意識を高めようと、保護者による面接指導が行われ、社会人の目線で生徒にアドバイスができる機会になり広がりを見せている。本年7月には本事業に深く関わっている企業、役場、高校の代表者によるパネルディスカッションが開催され、産官学連携によるキャリア教育の活動状況等を報告したところ、約100人の参加者から示唆に富んだ内容であったと高く評価された。

2018年に始めた①「職場見学」を皮切りに、ハッピー上市会が中心となって地域全体で教育を考える土壌を育ててきた。企画に参加した生徒や受入れ企業に少なからずポジティブな影響をもたらせ、地域全体の活性化・地域力を高める機会となっている。こうした蓄積が上市町ならではのキャリア教育を魅力的なものへと高めてきたが、③「キャリアバイト」開始による活動範囲の広がりに伴い今後ますます発展していくことが期待される。

学校現場の評価・感想・コメント

多様化する社会において学校だけで職業観を育成することは難しく、生徒が就職先を選ぶ基準は給与と福利厚生が良い会社となっていた。職業観が十分に育たず社会に出てしまうと、やり甲斐や、やりたい仕事が見つからないため、労働条件の食い違いや人間関係のトラブルが少しあっただけで早期離職をする生徒が出ていた。

ハッピー上市会の協力で「職業を知る会」や「職場見学」を実施できたことで、これまで十分に提示できなかった「働く意義」や「働く人の声」などが聞けるようになった。生徒からは「楽しそうに仕事をしてきた」や「仕事にプライドをもっていった」など仕事に対するイメージが実感を持って得られるようになっている。こうした経験をすることで、意識が大きく変化し、生徒の事前学習の質問と事後学習の感想とでは記述量に明確な差があり、教室では学ぶことができない効果があると確信している。また、進学希望者であっても将来就職する際に必要な資格を考えたりする貴重な機会となっている。「職業を知る会」や「職場見学」に参加した企業へ就職を希望する生徒が出てくるなど、地域と学校相互に効果が生じている。

関係諸機関（行政・産業・地域団体等）からの評価・感想・コメントなど

＜職業を知る会（R6.5.29開催）生徒の声抜粋＞

【受け入れ企業（1）：かみいち総合病院】

私がかみいち総合病院の話聞き、どの職種でも一つ一つ大事な役割があり、生活を守ってくれていると感じられた。私は、介護福祉士の前に、助産師に憧れていました。人の命を支える仕事は私の仕事の中で一番キラキラしている職業です。どの職種も素敵で人と人を支えあえる職業だと改めて思った。

【受け入れ企業（2）：株式会社ニッセイテクニカ】

ゆるみ止め加工にプライドを持っていることが話の節々に感じられました。この加工があるおかげで安全に物を使っているとわかり製造業で働きたい気持ちが強まりました。私もプライドを持てる会社で働きたいと思った。

【受け入れ企業（3）：株式会社アルティネット】

会社の特徴を知るだけでなく、何をしたら自分自身がよく成長するのかをよく考えさせられる時間になった。

【受け入れ企業（4）：松井エネルギーモーターズ株式会社】

人のために車をなおし笑顔をつくるなんて素敵な仕事だなと思った。自分が熱中できることをしろうとアドバイスをくれて感謝しかない。

【受け入れ企業（5）：社会福祉法人上市町三日市保育園】

お話を聞くのは2回目だが、保育園の大切さや保育園で働くという大変さについて知ることができた。進学は保育関係ではないが、お話を聞いて少しは自分の進路に役立ったと思った。もっと進路について考えようと思う。

富山県議会において、教育長からハッピー上市会の支援のもと行われている②「職業を知る会」などについて感謝の意を示すとともに、上市高校の例も参考にして高校生のキャリア教育の充実に努めたい旨の答弁がなされている。

富山県下の全自治体での中小企業振興条例制定の運動を展開している富山県中小企業家同友会では、条例制定によって地域の産官学が一堂に会して議論する振興会議が設置されることが何より大切と認識しているが、上市町はその振興条例が存在しないまま振興会議と同趣旨のハッピー上市会が活発に運営されていることを稀有な事例として高く評価している。

上市町役場もハッピー上市会の一員として議論に参加しているが、行政ではなく企業が主体となって運営されていることが大きな特徴であり、それ故に町の課題に対する意見や提案をしっかりともらえる貴重な場となっている。

また、上市高校と町との接点は過去にはほとんどなかったが、ハッピー上市会の活動がきっかけとなり、高校が望むこと、町が望むことのマッチングもできるようになり①②③以外にも企画が生まれるようになった。例えば、高齢者のスマホ教室では高校生がスマホサポーターとしてマンツーマンで講師を務め、参加者はもちろんのこと県の担当部署にも高く評価され、県政テレビ番組でもこの取組みが紹介された。

<キャリアバイト受け入れ企業の声抜粋>

【受け入れ企業（1）：つるぎの味蔵（里山の駅）】

「キャリアバイト」に来てくれているだけあって、お手伝い感覚ではなく、仕事として取り組んでくれた。業務中もただ言われたとおり作業をするだけでなく、もっとスムーズにできる方法を考えながらやっていてどんどん上達していった。

【受け入れ企業（2）：都（ラーメン屋）】

接客することで身につく挨拶やコミュニケーションスキルは今後社会に出ても絶対に役に立つ。そういった意味では生徒はお金以上のものを得ていると思う。キャリアバイトが今後高校、生徒、受入事業者3方良しの取り組みになってほしい。

＜職業を知る会参加企業の声抜粋＞

【参加企業（1）：特別養護老人ホーム常楽園】

このような場は企業・生徒ともに良い場だと感じている。参加して刺激をいただき、今後の仕事場での関わりに活かしていきたいと思う。

【参加企業（2）：穀行福祉会音杉保育園】

「職業を知る会」は、生徒さんたちにとって様々な職種を気軽に知ることができる機会なので、今後も続けてほしいと思う。

【参加企業（3）：富士化学工業株式会社】

中学生から高校生になったばかりの1年生に対して初期の段階で、早ければ3年後に働いているという意識を持たせることは大事なことだと思う。



提供：北日本新聞



提供：北日本新聞



(写真2) 職場見学



(写真3) インターンシップ



(写真4) キャリバイト

提供：富山新聞



(写真5) ハッピー上市会 (左)
グループディスカッション (右)



(写真6) 上市高校の産官学で取り組んでいるキャリア教育を学ぶパネルディスカッション

提供：北日本新聞



(写真7) 高校名変更の要望

提供：富山新聞

【取組概要】

団体名	吉賀高校版 サクラマスプロジェクト
活動の内容（概要）	サクラマスプロジェクトは、吉賀町の教育の長期的な取り組みであり、柱でもある。学校・家庭・地域が一体となり、吉賀町での豊かな学びや体験、多様な人との交流を充実させ、いつの日か吉賀町を支える人材（財）を育てるとい、吉賀町の保・小・中・高すべての子どもを対象にしたキャリア教育プログラムであり、吉賀高校のスクールミッションと重なる取り組みである。

受賞理由

- 高校魅力化×キャリア教育の象徴的な事例
- サクラマスプロジェクトによる関係人口の創出は地方の高校改革にとって参考になるもの
- 高校存続の危機から存続と魅力化を図るために平成25年より継続的に挑戦を続けており、町内8校の小中学校との連携や町役場と町教育委員会が一緒になった「サクラマスプロジェクト」の進化が伺える。PJのネーミングにも思いが込められているが、各公民館単位で「地域会議」を行いながら実践的な取組が積みあがってきていることは評価できる。
- 「少人数指導によるきめ細かな学びを提供するとともに、地域の保・小・中学校や関係団体と連携した課題解決型学習等を通して、地域や社会の未来を支えることができる人材を育成する」というスクール・ミッションに即した学校・家庭・地域が三位一体となった取組である。応援したい。
- 条例により設置した協議会だけに、地域会議開催や月1回のプロジェクト会議など、地域の一体感や教育プログラムの質の高さが感じられ、地に足の着いた展開となっている。アドミッションポリシーとのリンクも、学校側の取り組みの意欲が伝わってくる。小中校に加えて首都圏大学との連携という点でも交流人口増に寄与しており、他地域の模範となりうる。

連携・協働している機関や団体、組織

【教育関係者（学校、教育委員会等）】

島根県立吉賀高等学校・吉賀町教育委員会（町内中学校3校・小学校5校）

【行政（首長部局等）や地域・社会（NPO法人やPTA団体等）、産業界（経済団体や企業等）】

吉賀町役場・町内公民館（5地区）・町内保育所（4所）等

活動開始の経緯

サクラマスプロジェクトは、降海型のサクラマスのように子どもたちがいつの日か吉賀町を支える人材に成長してほしいという願いから始まった。町の将来を担う人材育成のため、地域の子どもは地域で育てるという理念のもと、町役場と町教育委員会そして県立の高校が加わり、保育園から高校までを包括するキャリア教育プログラムを立ち上げるに至った。高校に関しては、平成18年に学級数が2から1に減り、町で唯一の高校が存続の危機であった。地域と一体になり吉賀高校の存続と教育の魅力化を図り、平成25年にサクラマスドリームプロジェクトという名称で高校版がスタートした。

【「協力性」についての具体的な取組、工夫している点など】

平成25年に町役場と町教育委員会が一緒になり「サクラマスプロジェクト」を発足させ、高校版もこの年に始まった。平成27年3月に制定された吉賀町の「吉賀町サクラマスプロジェクト推進協

議会設置条例」により、推進協議会が発足した。その役割は、サクラマスプロジェクトに係る情報の収集及び啓発、推進に係る研修、プロジェクトの計画・評価・検証、各地区サクラマスプロジェクト地域会議の支援、その他目的達成のために必要な事項、と定められた。また、町長が委嘱する協議会の構成員は、地域会議代表・公民館代表・社会教育委員代表・学校関係代表・保育所関係代表・PTA代表・地域団体代表・産業関係代表・児童福祉代表・その他町長が必要と認めた者、と多様である。

各地域では、各公民館単位ごとに、「地域会議」を行い、学校や各団体で行われている子どもの育ちにかかわる活動の情報交換や連絡調整、地区の取り組みについての協議などを行っている。学校やPTA、地域団体などさまざまな方の協力を得ながら、推進している。町役場・町教育委員会と高校の連絡調整のために「吉賀高校プロジェクト会議」が月1回開催されており、より実務的な議論がなされている。

また、平成13年度から町内中学校と吉賀高校は連携型中高一貫教育校として県の指定を受けており、中高合同職員会議を年2回開催したり、中高の授業交流や部活動交流などが行われている。

「継続性」についての具体的な取組、工夫している点など

サクラマスプロジェクトでは、「育てたい子ども像」を共有し、吉賀高校のアドミッションポリシーともリンクさせている。本プロジェクト第2期の「育てたい子ども像」は

- (1) 地域の様々な人と交流し、力を合わせることができる子ども
- (2) 地域の環境資源を活かした学びを基に自分と向き合う子ども
- (3) 地域の現状を知り、ふるさとの未来に向けて行動できる子ども
- (4) 地域の中で学ぶことにより、広い視野を身につける子ども

と設定されている。

中高合同職員会議では、上記4つの「育てたい子ども像」のうち、特に重点的に推進する項目を絞って取り組み、具体的な評価指標を設定して取り組み成果を分析している。

また、高校魅力化評価システムを活用し、社会性や探究性または協働性に関わる自己認識や行動について生徒や地域の大人の方にアンケート調査を実施している。具体的には「地域の人や課題にじかに触れる機会があるか」や「自分とは異なる意見や価値を尊重することができたか」、「立場や役割を超えて協働する機会があるか」などの質問項目についての回答結果やデータの変化を学校運営協議会等で情報共有している。

「実践性」についての具体的な取組、工夫している点など

吉賀高校では「アントレプレナーシップ教育」を核とした教育を展開し、地域をフィールドにした探究的な学びを推進している。地域社会の特長や課題を知り、自己と社会の接点を探るため、あるいは生徒の考案したプロジェクトを実践するために、地域の様々な主体との協働が欠かせない。公民館や保育所、社会福祉協議会、社会福祉法人よしかの里福祉会、その他町内企業や個人事業主と連携しながら高校生の学びを深めている。

吉賀町内の各中学校も、このサクラマスプロジェクトの一環として、それぞれ独自のキャリア教育やふるさと教育に力を入れている。例えば、吉賀中学校の「結（ゆい）プロジェクト」、六日市中学校の「チャレンジアワー」、柿木中学校の「わが郷土柿木を探ろう」。こうした活動で身につけた力、知識、感性、人脈などは、キャリア・パスポートにも蓄積され、そのまま吉賀高校の「アントレプレナーシップ教育」に生かされ、個々のキャリア形成へとつながっている。

また、高校3年生が町内全小学校に出かけ、自らのキャリアを語り、小学5・6年生と対話する「サクラマス・とーく！」を毎年実施している。小学生の良きロールモデルとなり、次世代へとバトンをつなぐ学びの循環を創り出している。

「発展性」についての具体的な取組、工夫している点など

毎年2月に、吉賀高校の「アントレプレナーシップ教育成果発表会」を地域に公開する形で開催し、町内中学生や地域内外の大人も参加する。複数の大学教授を講師に招き、町民の前でこの取り組みの価値づけをしていただいている。さらにこの発表会翌日には町の「サクラマスフェス（旧サクラマスプロジェクトフォーラム）」を開催し、地域ごとの取り組みや学校内外の子供たちの取り組みを発表したり、共有したりする会を開催して、町ぐるみの教育・人材育成の機運醸成を図っている。



また、平成29年度から青山学院大学・法政大学、令和5年度からは桜美林大学も加わり、高大連携事業を実施しているが、これも町との協働により継続可能となっている。夏には大学生約20名が数日間、吉賀町に来て中高生や町民と交流する。高校生とはアントレの授業の一環で、一日かけて町内フィールドワークと一緒に出かけ、秋に東京研修で大学生と再会し、東京でも一緒にフィールドワークを行う。大学生との交流を通して、高校生は特に「広い視野」「協働する力」を伸ばせたと実感する。大学が近辺に存在しない地域に住む高校生が大学生という存在を身近に感じる貴重な機会であり、様々な刺激を受ける。また、大学生が普段気づかない吉賀町の良さを再認識させてくれ、高校生の地元愛醸成や地域貢献意欲、さらには進路意識向上にもつながっている。大学生交流も、本プロジェクトのキャリア教育の一環として大きな役割を果たしている。

学校現場の評価・感想・コメント

町が掲げる「サクラマスプロジェクト」を柱とした、地域住民と一体となった探究的な学びやキャリア教育は、関係する各校児童・生徒の発達段階に応じ、それぞれが立地する地域の特性を生かしながら展開され、健全なキャリア発達の支援に繋がっていると評価する。特に高校段階においては、三菱UFJリサーチ&コンサルティングが提供する「高校魅力化アンケート」において、「社会性にかかわる学習活動」に関し、「地域や日本・世界の課題の解決方法について考える」ことに対する生徒の肯定的回答割合が、県平均および全国平均値に比べ、20～30ポイント高い数値となっており、その成果をうかがい知ることができる。「アントレプレナーシップ教育成果発表会」等において、生徒は自身の取り組み内容や結果のみならず、活動を通じて得られた「自身の考えの変容」や「実感する自身の資質・能力の成長」について、自ら言語化して他者に伝えることができ、個々のキャリアが確実に発達していることが確認できる。

また、高校生の探究的な学習・活動に対し、さらに実践的な機会の提供を提案する声が地域住民からも寄せられ、関係事業の継続性のみならず、学校のさらなる魅力化や地域創生にも期待できる。

関係諸機関（行政・産業・地域団体等）からの評価・感想・コメントなど

「サクラマスプロジェクト」では、高校生世代において「地域課題について考え、ジュニアリーダーとして実践する」ことを期待している。アントレ学習あるいは各地域で行われる行事への参画など、教育課程の内外を問わず地域の様々なフィールドで高校生の活躍が見られている現状は、まさにこの期待する姿を体現しているといえる。高校生が地域の課題を自己の課題として捉え、その解



決に積極的に向かう姿は、小中学生にとってのよきロールモデルであり憧れの姿となっている。「サクラマス・とーく！」で小学生と高校生との対話を通して互いの生き方や価値観に触れたり、高校生が探究の過程の中で企画したイベントへ小中学生が参加したりするなど、その交流の機会は様々創り出されている。また、それのみならず、高校生と関わり見守る地域住民にとっても地域への新たな気づきを促し、主体的に地域課題へ関わろうとする意欲の向上につながっている。令和5年度の「サクラマスフェス（旧サクラマスプロジェクトフォーラム）」では、各地域の事例発表において半数以上の地域で高校生が発表者の1人として登壇しており、高校生の学校内外での学びやつながりが魅力的な地域づくりに活かされていることがわかった。

今後も、サクラマスプロジェクトでは高校生をはじめとする多様な世代・立場が連携・協働することによる「人づくり」「つながりづくり」を進めていきたい。

【取組概要】

団体名	新潟県立中条高等学校
活動の内容（概要）	①地域貢献1：胎内市、5大学、21の企業等と連携した「中条高校地域アカデミー」を構築し、地域の課題発見・課題解決 ②地域貢献2：小中学校で絵本の読み聞かせ ③職場体験：30企業でインターンシップ ④地元企業のDX化：企業の課題をプログラミングで解決 ⑤地元店舗の広告宣伝：広告用ポスターとCM動画の作成 ⑥地元食材を使った商品開発：米粉を使った商品開発と販売 ⑦他県の高校生と交流：生徒交流会

受賞理由

- 胎内市の地域課題と向きあって、新潟リハビリテーション大学など多様な連携の中でそれらの課題を解決していく取組は、地域の活性化とキャリア教育が一元化したものとして高く評価できる。オリジナル商品の開発まで行っているのは素晴らしい。
- 行政、大学、企業等と協定書を交わし連携した「中条高校地域アカデミー」、協力性は満点。21の探究テーマごとに、協力企業団体・協力大学の担当教科がはっきりしている。地域の課題発見・課題解決によって高校のキャリア教育が地域とwin-winの関係を作り、一体感を強固にすることによって地元からの信頼感を増し、生徒の自己効力感も上げている。今後、地元企業のDX化と広告宣伝、商品開発で地元企業にさらに深くかわり、結果を出すことで地元企業への愛着が高まり、地元で活躍したい人材となっていくのではないかと期待される。恕の心、いいですね。地域と未来をつなぐ学校としてわくわく感が止まらない。
- 地域におけるキャリア教育のプログラムとして、地域貢献、インターン、プログラミング、動画作成、商品開発、他県交流など、とても実践的で実効性があるコンテンツをしっかりとラインナップしており、その効果がうかがえる。それらの体系化により複数つなげた時の生徒への影響や教育効果、地域や企業にもたらす価値などはとても興味深い。

連携・協働している機関や団体、組織

【教育関係者（学校、教育委員会等）】

新潟大学、上越教育大学、新潟食料農業大学、新潟リハビリテーション大学、新潟経営大学、新潟職業能力開発短期大学校、山形県立小国高等学校、山梨県立笛吹高等学校、胎内市立中条中学校、胎内市立乙中学校、胎内市立胎内小学校、胎内市立中条小学校、胎内市立黒川小学校、胎内市立ききの小学校、新潟県教育委員会、胎内市教育委員会

【行政（首長部局等）や地域・社会（NPO法人やPTA団体等）、産業界（経済団体や企業等）】

胎内市、胎内市商工会、新発田市商工会、社会福祉法人 愛光会、胎内市スポーツ推進委員会、県議会議員、胎内市議会議員、胎内美人妻の会、荒惚、佐藤機工、中条グランドホテル、新潟日報社 新発田総局、中条農産、胎内特産品研究会、いちごカンパニー、乙まんじゅうや、胎内市電気工事協同組合、延本石油株式会社追分給油所、胎内市観光協会、高橋興業、小松自動車、ときや旅館、吉田電材蒸留所、NPO法人ヨリシロ、胎内市地域おこし協力隊、インターンシップ先企業30社、広告宣伝実習企業（記載済み企業を除く）17社、ジェイマックソフト、新潟県NIE推進協議会、新潟製粉

活動開始の経緯

平成31年度に普通科総合選択制の高校となり、普通科目とともに、専門的な知識や技能を学ぶ科目を選択できるようになった。そして、普通科の学びとともに地域学習をとおして「学びを社会で活用する力」を身につけ、主体的に社会貢献できる人材を育成するカリキュラムにした。コロナ感染症の拡大の影響で地域連携の取組を本格的に開始したのが令和3年度である。地域学習・地域連携をベースにしたキャリア教育に取り組んでいる。

「協力性」についての具体的な取組, 工夫している点など

①令和3年度より、胎内市観光協会の協力を得て、胎内市の11の企業等からテーマごとの講義を実施し、生徒はそれを受けて地域課題の理解と解決策を考え実践した。課題解決を考える際、新潟リハビリテーション大学の学生の援助を受けた。令和6年度からは新潟県の支援を受け活動を拡大発展させ、21の企業等から21のテーマで講義を受け、5大学の教職員と学生17名の伴走支援を受け地域の課題解決に取り組んでいる。なお、地域連携をより充実させるため、令和5年度に胎内市、令和6年度に胎内市商工会、新潟リハビリテーション大学、新潟食料農業大学と連携協定を締結した。

②令和6年度より、小中学校の地域コーディネーターとの連携により、胎内市の小中学校4校の全クラスで朝のSHRの時間に高校生が絵本の読み聞かせを実施した。③2年次にインターンシップを地元企業及び新発田市商工会との連携により実施している。また、胎内市との連携により企業見学バスツアーを実施している。それらにより、働くことの意義や地元のへの愛着を育てている。④⑤企業の課題をプログラミングで解決(DX化)及び店舗の広告宣伝ポスター・CM動画作成は、企業と生徒にとってWin-winになっている。⑥令和5年度より生徒が企業のアドバイスを受け米粉を使ったオリジナル商品を開発し、地域イベントで販売につなげた。⑦山形県立小国高校との生徒間交流は、協働イベントにつながっている。

「継続性」についての具体的な取組, 工夫している点など

①胎内市、胎内市商工会、新潟食料農業大学、新潟リハビリテーション大学と連携協定を結び、継続的な連携を構築した。また、中条高校地域アカデミーが長期に継続できるよう、新潟県教育委員会、運営指導委員(複数の大学教職員や胎内市教育長)から、より良い運営のために指導助言してもらっている。また、外部の教育アドバイザーから今年度より2年間伴走してもらうことにより、工夫改善を行っている。②読み聞かせの活動ごとに、訪問先の学校からの意見を聞き、高校生や指導教員のモチベーションにつなげている。また、小中学生が満足できるよう事前の準備を計画的に行っている。③職場体験では新発田市商工会と地元企業との連携、胎内市企業見学ツアーでは、胎内市との連携により継続的に実施できる体制を作っている。④地元企業のDX化ではプログラミング支援を外資業者及び専門学校に委託することで、職員の負担を軽減させ継続できるようにしている。⑤広告宣伝では胎内市観光協会の会員企業に協力いただき、毎年別の企業での実習ができる体制を作っている。⑥米粉を使った商品開発と販売では米粉製造の企業や地域イベントの主催団体との連携体制が構築されており、長期継続ができるようにしている。⑦生徒間交流はスタート初年度であるが、今後、職員の交流を一層密にするとともに、生徒が楽しく協働し、イベントを企画立案し、成功体験を重ねることで、長期的な継続につなげる。

「実践性」についての具体的な取組, 工夫している点など

①地元企業や団体等から直接現状を聞くことで、胎内市の抱える課題を知り、その解決策を大学と連携して考える。フィールドワークにより、生徒が考えた課題解決の方法を再検討、修正することで、地域で本当に必要な取組になるよう計画している。これらの取組により、生徒は多くの大人や学生と関わり、コミュニケーション能力が向上し、自己肯定感が高まる。②本校生徒が、小中学生のキ

キャリアモデルとなり、地域の子どもたちのキャリア教育につながっている。また、この活動が本校生徒の自己肯定感、挑戦する心を育てている。③地元企業を実際見たり、働く経験をすることで、キャリア探究が進み、進路決定に大いに影響する。また、職場体験により体験先企業への入社を果たすなどの事例もある。④⑤学校での学習内容を生かして、一般企業のDXを推進するプロジェクトへの参加や広告宣伝の仕事を行う中で、企業の担当者から要望が出され、取組に対しての改善点を指摘されるなど、アントレプレナーシップ教育となっている。⑥米粉発祥の地である胎内市の米粉を使い、生徒が商品開発を行っている。開発した商品を地域のイベントで販売することにより、生徒は多くの地域の方と関わり、地域連携による地域貢献になっている。⑦山形県立小国高校及び、山梨県立笛吹高校と生徒間交流をしている。両校とも地域連携先進校であり、キャリア教育の充実に大きな効果がある。

「発展性」についての具体的な取組、工夫している点など

①「中条高校地域アカデミー」では現在21の地元企業や団体、地域おこし協力隊、5つの大学等と連携し、県の事業に取り組み、地域から信頼される公立高校を目指し活動を行っている。この地域学習を主としたPBL型授業と、ルーブリック評価により生徒自らが成長を感じ、自己肯定感が高まるよう工夫している。この活動の実践と発信により、中条高校と連携したい企業やNPO、地域のボランティア団体からオファーもきている。②現在2つの中学校、4つの小学校で読み聞かせを実施しており、児童・生徒・職員からとても高い評価をいただいている。今後、胎内市の他の小中学校でも実施する可能性がある。③生徒が地元企業の魅力を発見し、地元への愛着が増すことで、地域で活躍する人材になることが期待できる。④⑤本校の地元企業への貢献が地域で周知され、地域から本校への期待や信頼が高まっていると感じている。胎内市商工会や企業とつながったことにより、今後、企業のDXや事業所の広告宣伝について、事業所から依頼がくることも期待できる。⑥商品開発では、地域でのオリジナル商品販売の成果により、将来的には生徒が作った商品を地元商店での販売も期待できる。⑦本校の文化祭に小国高校生が参加した。笛吹高校との合同企画も検討しており、地域学習、地域連携の取組をさらに発展させたい。

学校現場の評価・感想・コメント

- ・中条高校地域アカデミーを立ち上げたことにより、胎内市、事業所、大学とさらに強い繋がりができ、探究活動の充実と、地域とよりよい関係が築いていけると思う。
- ・絵本の読み聞かせは、思った以上に中学生、中学校職員に好評で、生徒達が一生懸命練習した甲斐があった。
- ・以前から地域学習に力をいれていたが、今年度の多くの変革でイノベーションの年になった。
- ・職場体験では、約30の事業所に受け入れていただき、学校ではできない実務経験をさせていただいている。地元企業の人材確保にもつなげて行きたい。
- ・令和5年度より地元企業のDX化を行っているが、生徒にも企業にもWin-winの活動になった。
- ・広告宣伝では、思った以上にポスターの宣伝効果があり、SNSのXではインプレッション14万回の大反響のポスターもあった。
- ・米粉を使った商品開発では、今まで新潟製粉の方から米粉に関する講義をさせていただいていたが、今年度より米粉フェスタに参加することができた。今後も胎内市の米粉を宣伝していきたい。
- ・様々な新規活動を行っているが、生徒の成長に重点を置くものとしてやっていきたい。

- ・地域学習・地域連携により、生徒が自己肯定感をあげ、前向きに物事に挑戦する力を伸ばす取組としたい。
- ・今年度より、地域協働部という部活動も創設し、新規の地域連携がやりやすくなった。
- ・生徒以上に教職員が生徒の可能性を信じるのが重要だ。

関係諸機関（行政・産業・地域団体等）からの評価・感想・コメントなど

○中条高校地域アカデミーについて

- ・自分にとって刺激的で学びのある体験だったのでありがたいです。（大学生）
- ・活発に活動されていた生徒の皆さんに感動した。（大学生）
- ・大学生にとって大変良い経験になったと思います。（大学教授）
- ・大学生と高校生との交流の中で新しいアイデアが生まれ活発な活動である。（大学教授）

○絵本の読み聞かせについて

- ・感動して涙がでました。毎週来てもらいたいくらい。（中学校職員）

○企業のDX化について

- ・生徒のプログラミングに対する理解力や問題解決能力が高い。（企業のデジタルアドバイザー）

○広告宣伝実習について

- ・作ってもらったポスターのおかげで売り上げが伸びた。（事業者）
- ・ポスターとCMを作ってもらいたい（観光協会の会員企業）
- ・生徒が作ったポスターをSNSで紹介したら14万回閲覧され大反響があった。（事業者）

○各種活動全般について

- ・中条高校が精力的に新しい取組を実践し、地域と関わり、学校がどんどん活性化している（地域）
- ・胎内市内企業との連携や「中条高校地域アカデミー」など、地元企業を実践の場とした探究的な学びは、働くことの意義を理解し、地域への愛着を深めることにつながっている。また、中条高校の生徒が地元企業に貢献する姿は、市内小中学生に良好な影響を与えるだけでなく、地域住民の関心と期待の向上にも大きく寄与している。（胎内市教育委員会）



オリジナルスイーツ：もちり米粉スイーツポテト



広告宣伝実習でのポスター



山形県立小国高校で：両校の生徒による協働イベントの打合せ

【取組概要】

団体名	ライフ・キャリア図鑑「COMPASS」
活動の内容（概要）	様々な分野で活躍する大人（大学生含む）が自身の経験・現在・未来について語ったプロフィールページを WEB 上に作成。その中で中学生が興味を持った分野の活躍する大人と、オープンチャットで交流し、アドバイスを得る。中学生が自分のロールモデルとなるような大人を見つけ、将来への展望を持って様々な学びや体験ができるようにする。本サイトは学校で外部講師を招聘する際の人材バンクとしても活用が可能である。

受賞理由

- 多くの組織の協働で、従来の「職業」、「職場」だけに着目したキャリア教育ではなく、個人の「生き方」、「価値観」にも着目した新しいキャリア教育支援ツールを開発している。中学生が真に興味を持っている分野で活躍する大人や大学生などに繋がり、具体的な進路選択を考えていく上で有益なアドバイスを得られるような、個に即した取組を提供している点は高く評価できる。
- キャリアを人生と捉え、個人の生き方に焦点を当て、何のために学ぶのかを意識させた双方向性のキャリア教育支援ツールの開発は、斬新である。いつでも大人にキャリアの質問ができたり、自分のロールモデルを持つことができるなど今後、さらにキャリア教育の枠が広がると感じた。COMPASS のプロフィールを読ませていただいても本音が語られているからか、非常に勉強になると感じた。ただ今後協力者を増やしていけると思うが、なかなか人選が難しいのではないかと、そして情報量が多くなるにつれ、個人情報などサイトの維持管理にもかなり工数がかかるのではないかと少し心配になった。
- テスト運用から PDCA を行い、着実に広げている。また生徒の特性を考慮したサイト運営など広がりが楽しいプログラムである。
- デジタル時代にふさわしいプラットフォーム型キャリア教育で、多様なロールモデル・生き方に接することができる、地域のキャリア教育の中核たる可能性高いプログラムである。地域や属性などにとらわれず、オープンに参加しやすく、PDCA もしっかりと意識されている。今後はリアルでの取り組みとの連動なども期待できる、将来に向けて楽しいプログラム。

連携・協働している機関や団体、組織

【教育関係者（学校、教育委員会等）】

松原市教育委員会、松原市内全小中学校、松原市校長会及び教頭会、静岡大学塩田研究室、大阪教育大学、阪南大学、大阪大谷大学、四天王寺大学、大阪公立大学、大阪文化服装学院、松原市地域教育協議会

【行政（首長部局等）や地域・社会（NPO法人やPTA団体等）、産業界（経済団体や企業等）】

松原市役所、松原消防署、松原市キャリア教育懇談会（松原商工会議所、松原ロータリークラブ、松原ライオンズクラブ、松原商店会連合会、松原中ロータリークラブ、松原青年会議所）、NPO 法人やんちゃま with、日本フリーランスウーマン協会、松原市社会福祉協議会

活動開始の経緯

令和2年度以降、コロナ禍により人が出会う活動が制限され、市内小中学校では職場見学や職場体験の機会がなくなるとともに、GIGA スクール構想により子どもたちの学び方も大きく変化した。さ

らに、「働き方改革」「人生 100 年時代」「ウェルビーイング」「価値観の多様化」などにも見られるように、子どもたちを取り巻く社会は急激に変化している。これらの変化に学校教育も適切に対応していくため、「自分は将来どのように生きていくのか」「そのためにどんな力をつけ、どう学びを積み重ねていくのか」ということを子どもたちが真剣に考える機会を創出することが急務であると考えた。そこで、松原市教育委員会は、民間企業の力を活かしたキャリア教育で実績のある静岡大学塩田研究室の協力を得て、従来の「職業」、「職場」だけに着目したキャリア教育ではなく、個人の「生き方」、「価値観」にも焦点をあて、子どもたちに「何のために学ぶのか」を意識させることで、「学びへのモチベーション」を高めることにもつながるような新しいキャリア教育支援ツールを開発することとした。

「協力性」についての具体的な取組, 工夫している点など

本市においては、長年にわたって学力向上が大きな課題となっており、学校における授業改善や教師の指導力向上に向けての取組を行ってきた。その一方で、子どもたちの自己肯定感の低さ、将来の夢や目標を持てている者の割合の低さ、学校外における時間の使い方（読書時間の少なさ、スマホ・ゲーム利用時間の多さ、学校外での学習時間の少なさ）の課題などもあることから、教育関係機関と家庭、地域、産業界の協働によるこれらの状況の改善が強く求められていた。

また、コロナ禍で職場見学・職場体験が実施できなくなり、学校と地元事業所との関係が希薄化してしまっただけから、産業界・地域関係者からその関係改善を求める声が大きくなっていった。

本サイトについては、その構想段階から各団体等に様々なデータを提供しながら趣旨・ねらいを説明し、対面及びオンラインで意見交換を重ねた上で、本サイトに賛同し、かつ、積極的に協力してくれそうな人材を紹介いただいた。協力者には、相手が多感な年代の中学生であることを踏まえ、分かりやすい表現で、心情に寄り添ったコメントをしていただくように要請した。

更に、教育長による近隣大学への出前講義等の機会を活用し、子どもたちが興味を持てるようなサイトの構成内容について、教員志望の大学生からアイデアを募るとともに、大学生自身にも教員をめざすという自らのキャリアについて改めて見つめ直す契機となるような工夫を行った。

「継続性」についての具体的な取組, 工夫している点など

本サイトはいきなり全ての学校で展開していくのではなく、複数校×複数名という小規模な単位から試験運用を開始し、その規模を大きくしながら複数回実施するとともに、その都度、分析・評価とともに改善点を洗い出すための事前・事後アンケート調査を実施することとしている。また、当該アンケート結果については公表し、外部からの客観的な評価も反映していけるようにしている。このようにPDCAサイクルを意識した取組にするとともに、教育委員会事務局内にPTを設置し、市役所内の関連する部局も含めたミーティングを定期的を開催することで、効果的・効率的な運用に努めている。

本サイトの運用に際しては、安心・安全への配慮が最も重要であることから、中学生は匿名での参加とするとともに、中学生と協力者との間で保護者や教員の目が届かない私的なやりとりがなされないよう、メッセージのやり取りはサイト上に限定したオープンチャット形式で行うこととした。その際、メッセージに誹謗中傷や個人情報の漏洩につながるようなものが含まれないよう、松原市教育委員会と静岡大学塩田研究室のダブルチェックを経て問題なしと認められたもののみを反映するようにしている。

なお、協力者に対しては、あくまでも自身の日常生活や仕事を最優先とし、生徒にメッセージを返すのは休みの日や空き時間など、無理のない範囲で行っていただくようお願いすることで負担感の軽減を図っている。

「実践性」についての具体的な取組、工夫している点など

本市小中学校では、従来から職場見学や職場体験などに協力いただける事業所の確保に困難さを抱えていた。特に、中学生の職場体験については、生徒は第一希望の事業所に必ずしも行くことができないなど、その体験が実際の進路選択に十分活かされていないのではないかという指摘に加え、受け入れ事業所側からは、職場体験に意欲的に取り組もうとしない生徒への対応に苦慮しているとの声が寄せられるなど、中学生の希望と受入れ先のミスマッチも大きな課題となっていた。

中学生の職場体験が活発に行われるようになって約20年が経過したが、それに伴い、産業・就業構造の大きな変化、ICT化、価値観の多様化なども進展した。子どもたちを取り巻く状況の変化のみならず、前述の課題にも適切に対応していくためには、「実施時期、業種、時間帯に制約のある事業所での体験活動を前提とした取組」から、「中学生が真に興味を持っている分野で活躍する大人や大学生などに繋がり、具体的な進路選択を考えていく上で有益なアドバイスを得られるような、個に即した取組」へとシフトしていく必要があると考えた。本サイトにおけるメッセージのやり取りをオープンチャット形式にすることで、中学生は自分が関係したものだけではなく、他の生徒と協力者のやりとりも全て見られるようにし、多様な物の見方・考え方に触れ、新しい学びや気づきにつながるチャンスが生まれるようにした。

「発展性」についての具体的な取組、工夫している点など

松原市においても、PTA活動や地域活動の担い手不足・固定化が課題となっているが、本サイトの開発により、これまでそれらの活動に参加したくても、仕事を休めない、時間帯が合わない、足を運ぶことが難しい等の理由から参加できていなかった層の掘り起こしにつながる事が期待できる。

また、危険な作業を伴う、衛生面での配慮が必要、顧客情報に触れさせられない等の理由から、職場見学・職場体験に協力できなかった事業所の方も、本サイトを通じて協力が可能になるほか、起業家や事業所を持たずに個人で活動している人、松原市内ではない遠隔地（海外も含む）で活動している人たちも対象となりうる点など、ウェブサイトの利点を最大限に活かした取組が可能となる。

更に、子どもたちが進路選択の仕方や勉強方法などについてアドバイスが欲しくても、保護者にその余裕やスキルがないケースや、思春期特有の発達状況から保護者や教師の干渉を嫌い、距離を取ろうとするようなケースなどが散見されるが、適切な時期に適切なアドバイスを得ることが難しい子どもたちにとっては、本サイトを活用することで、様々な協力者からアドバイスや情報を得られるようになる。ひいては、本サイトを通じて、子どもたちの教育に何らかの形で協力・貢献しようとする大人が増加することで、社会全体で子どもたちを育てていこうという機運の醸成にも好影響を与えていくことが期待できる。

学校現場の評価・感想・コメント

・コロナ禍で職場見学や職場体験が出来なくなり、各学校ではキャリア教育を進めていくための具体的な取組をどうすればいいのか苦慮していたが、進路選択の先にある自分自身の生き方を考えさせるための新たなツールとして活用できる。

・協力者として大学生や仕事に就いて間もない人も登録されているので、中学生は「数年先を走っている先輩」として捉えており、親近感を持って質問等ができていたようだ。

- ・本校の不登校傾向のある生徒にも本サイトを使わせてみたところ、協力者に積極的にメッセージを送るということはできなかったが、家庭にいるときも気になる協力者のページを何度も見たと言ってくれた。
- ・小学生にはまだ質問出来るほどの文章力・表現力は十分育っていないが、様々な仕事や生き方があるということは本サイトを閲覧することで参考になっていると感じる。
- ・ともすればキャリア教育の取組と学力向上の取組は別物と考えがちであるが、何のために学ぶのか、学んだことが将来どう生きるのかということに気付ける教材だと思う。
- ・これまでは、各教科等で学ぶ現代的な課題（SDGs、SNS利用、ダイバーシティなど）に関連付けて外部講師を学校にお招きする際の人選や相談先に困っていたが、本サイトに掲載されている協力者をお願いしたところ、快く受けていただけた。
- ・もし、自分が中学生の頃にこういうサイトがあったなら、学校で受ける授業にもっと意義を見出せたような気がする。
- ・「タグ」機能が、子どもたちにとってはなじみやすく、使いやすかったようだ。

関係諸機関（行政・産業・地域団体等）からの評価・感想・コメントなど

- ・現在、PTA役員と地域教育協議会の役員を兼任していますが、子どもたちへの支援のあり方が「時間に余裕のある人」前提であり、なかなか世代交代が進まず、固定メンバー化してしまっています。このサイトは、新たなメンバー候補の拡大にも一役買ってもらえそうです。
- ・このサイトを通じて、例えば「夏休み期間に職場体験の受入れをしますよ」と告知すれば、この業界（ものづくり）に真に興味を持っている中学生だけ来てもらえるだろうから画期的だと思います。
- ・私は松原市出身ですが、今は市外で働いています。離れた場所からでも、松原の子どもたちのために役に立てるチャンスだと思うので、自分の経験や知っていることを伝えられたらと思っています。
- ・私たちの事業所では、これまで職場体験を受け入れたことはありませんでしたが、私たちの活動に興味を持っていただけるチャンスが出来たと喜んでます。
- ・今の社会は働き方も多様化しており、平日の定刻に出勤・帰宅するというスタイルだけではありませんでした。子どもたちがこれからの社会の様々な変化に対応していけるように、教育のツールや手法も工夫していく必要があるのだなと実感しました。
- ・このようなサイトは今までありませんでしたし、大人が見ても勉強になったり考えさせられたりすることがたくさん語られています。子どもたちが多様な価値観やものの見方に触れて、自分の将来について考えるきっかけが生まれる取組みだと思います。
- ・このサイトの協力者となり、プロフィールページを作成する過程で、これまで自分が積み上げてきたキャリアを見つめ直すこととなった。そのうえで、これからどういう力をつけ、どう視野を広げていくべきか考える機会をもらった。



COMPASSのトップページ



「仕事」「趣味」「感情」から「タグ」を選択することで、協力者を絞り込む